

# 民衆の自由から社会主義と市場経済を考える

—森岡真史『ボリス・ブルツクスの生涯と思想—民衆の自由主義を求めて』

2012年，成文社，に寄せて

齊 藤 日出治<sup>†</sup>

20世紀の初頭に，ロシアで民衆の自由を求めて，ロシア革命とその革命が生みだした社会主義経済に批判的に対峙した経済学者がいた。ボリス・ブルツクスがそのひとである。このブルツクスの生涯と思想を集大成した研究書が森岡真史によってしたためられた。

本ノートでは，この研究書を概説しつつ，そこから引き出されるいくつかの論点を提示してみたい。とりわけ新自由主義のグローバリゼーションが席卷する21世紀初頭の現代においてブルツクスの思想が有する意義について検討してみたい。

著者は序論でブルツクスの思想の要点を三つに整理しているが，ここにブルツクスがソ連邦の社会主義経済と向かい合った基本的なスタンスが集約的に表れている。

第1に，ロシア革命とその革命が生みだした社会主義経済を具体的動態的展開において考察する。社会主義の建設は思わざる困難に直面し，この困難に政府や民衆がどう対応したのか，ブルツクスはその過程を丹念に考察する。

第2に，ブルツクスの社会主義批判は，同時にナロードニキの農村革命論に対する批判でもあった。ロシア革命はナロードニキの土地の総割替という綱領を基盤にして進められたが，この革命は革命以前に芽生えていた農民経営の自律への道を閉ざし，ロシアの農村と農業を解体するという結果をもたらした。

第3に，ブルツクスは社会主義経済を批判するが，それはただちに自由放任主義を擁護することに通ずるわけではない。ブルツクスにとって，経済システムを判断する基準は，そのシステムが民衆の自由と利益にかなっているかどうか，にある。ブルツクスが私的所有と自由な市場を重視するのは，それらが民衆の自由をはぐくむための媒体として役立つかぎりにおいてのことである。つまり，ブルツクスの批判のまなざしは社会主義計画経済だけでなく，自由放任主義に対しても向けられていたのである。

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 経済学部 経済学科 教授

草 稿 提 出 日 9月11日

最終原稿提出日 9月24日

本書は全体が9つの章からなっている。各章の要点を整理しつつ、その研究が明らかにしたことをまとめてみたい。

第1部の第1章「ブルツクスの生涯」では、「ロシア革命以前」、「ロシア革命時代」、「亡命時代」の三つの時期に分けて、各時期におけるブルツクスの取り組みと思索がたどられる。

ロシア革命以前の時代に、ブルツクスは農林大学で農民経営の発展と市場経済との結びつきについて学び、またユダヤ人として、ロシアにおけるユダヤ民族の解放の問題に取り組み、ロシア帝国北西部のユダヤ人入植地の調査活動に携わった。

革命時代の1917-1922年には、ユダヤ民族の自律という視点から市民教育や文化運動に取り組み、農村問題については、国民経済と資本主義の発展と調和するような土地改革の必要性を訴える。1922年に社会主義を批判する雑誌『エコノミスト』の刊行を理由に「反革命家」として逮捕・国外追放の処分を受け、ドイツに亡命する。

亡命時代には、ベルリンでロシア学術研究所を設立するが、エスエル党のナロードニキ主義を批判したために、亡命者集団とも対立関係に陥る。ソビエト・ロシアの戦時共産主義からネップ経済へ、さらに第1次5カ年計画以後の農業の強制集団化とクラークの撲滅の政策をつぶさに観察し、知識人や農民の人権弾圧に対して抗議行動を展開する。晩年の1935年には、イスラエルのエルサレムに移住し、社会主義と並んで出現したナチズムを現代文明に対する脅威と位置づけ、民主主義の視点から社会主義とナチズムの双方の批判を展開する。

この第1章は、ブルツクスの生涯を通史的にたどることによって、2章以降、それぞれの時期ごとに詳細に論じられる課題と論点をあらかじめ提示し、ブルツクスの問題視座の生涯を通じた一貫性が鮮明に語り出されているのが印象的である。

この生涯の思索の歴史をたどることによって、ブルツクスがすでに大学時代を含む20歳のうちに、ロシア革命の激動と革命後の社会主義経済の動態的な展開に対する自己の確固たる視座を確立していたことが分かる。ブルツクスは大学時代における農業経済学の学習によって、ロシアの農業危機の原因が土地の不足ではなく、農村の過剰人口、およびロシアの国民経済の未展開にあることを洞察し、市場経済と私的所有の発展によって農村から都市への人口移動を促進し、工業と農業の有機的な分業関係を構築することによって国民経済の発展を促す必要がある、と提言する。この提言は、土地の売買を禁止し、土地の収用と農民への土地の均等割り当てを主張するナロードニキの主張と真っ向から衝突する。

またブルツクスは、ロシアにおけるユダヤ人の民族的解放をユダヤ人の問題に限定する

ことなく、ロシア全域における少数民族の自治権の承認の問題として取り上げ、国民国家が多民族と多文化の市民権を保証するよう提言する。さらに、パレスチナ問題にも関わり、パレスチナにおけるユダヤ人の経済建設がムスリム住民との結びつきを強め、中東経済全体の発展と有機的に連携する必要性を説く。

上記のようなブルツクスの農業改革とユダヤ人の民族解放の思想は、ロシア革命期、亡命生活期、晩年期を通じて、ブルツクスの一貫した視座をかたちづくり、この視座のゆえに、革命政府から迫害を受けると同時に、亡命先ではナロードニキ派の知識人とも衝突を余儀なくされ、苦難の生涯を宿命づけられることになる。

第2－5章からなる第2部では、ブルツクスの農村革命論が扱われる。

第2章の「土地改革の課題と方法」では、ロシア革命期に、ブルツクスが土地改革の課題を農民経営の発展に置き、農民経営を発展させるために国民経済の資本主義的発展を推進すべきだ、と説く主張に焦点が当てられる。

ブルツクスによれば、西欧と比べたロシアの農業問題の固有性は、工業が未発展なことにある。そのために、農村の過剰人口が都市に吸収されずに、民衆の貧窮が続いている。したがって、農民経営の発展と工業の発展を推進し、農業と工業の有機的な分業にもとづく国民経済を発展させることが、農村の危機を打開する道である。ブルツクスは、農村の土地が土地所有者だけのものではなく、国民経済にとっての主要な生産手段であることを強調し、それゆえ土地所有者は土地を国民経済の発展のために有益に活用する義務を負う、と主張する。したがって、土地の収用を行う場合でも、ナロードニキの唱えるように無償ではなく、有償で行うべきだ、と言う。

土地の分配は、農民経営の進歩をもたらすようにして行わなければならない、そのためには居住と土地との近接性を考慮した区画整理、土地信用の組織化、辺境地域への移住等の措置と連動させて、農業経営と国民経済の双方の発展に結びつける必要がある。

ナロードニキは土地の市場取引を排除して、すべての人民に土地への平等な権利を保証するよう唱えて、すべての土地を国家と土地委員会の管理下に移すよう主張するが、ブルツクスはその空想性を批判し、ナロードニキには土地を国民経済の生産手段とするという視点が欠落している、と批判する。

第3章「農村革命の前史」では、第2章のような土地改革の課題を設定するに至ったロシア農業の歴史的背景についてのブルツクスの見解が考察される。農奴解放以前のロシア農業では、18世紀初頭から農民が領主あるいは国家によって認められた耕地を家族の人数に応じて定期的に割替えるという慣行がうちたてられていた。この慣行を通して、農民のうちに土地の定期的な再分配という「土地への権利」意識が根づいていた。

1906年のストルイピンの農業改革は、共同体所有の下にあった分与地を私有化し、土地整理によって区画地経営を創出し、農村の信用組合を発展させ、農民の移住を促す政策を実施して、土地の私有化と農業および国民経済の発展を目ざした。ブルツクスは、ストルイピンによる、土地を私的資本に転化させ農工分業にもとづく国民経済を組織しようとするこの政策を高く評価する。

第4章「農村革命とロシア革命」では、ロシア革命によって、ストルイピンの改革の方向が否定され、「農民による土地の収用と分配」というナロードニキの土地の社会化理念にもとづく政策が進められたことが批判的に考察される。戦争の長期化と食糧危機に直面した政府は、経済統制を強化し、穀物専売法（1917年3月）を發布し、さらに10月革命後は地主的所有を廃止し、土地を無償で収用する法を布告した。1918年の土地社会化基本法は、ナロードニキによって組織されたエスエル党の綱領を基本的に継承するもので、「農民による土地の収用と分配」を法的に定式化するものであった。その意味で、ロシア革命における農村革命は、土地の総割替というロシアの伝統的な慣行を強力に復活させるものであった。ブルツクスはこの農村革命を、分与地に対する農民の無制限の権利を保証しただけで、国民経済と権力の民主主義化の発展を妨げるものである、と厳しく批判する。この農村革命は、ストルイピン改革のもとではぐくまれつつあった個人主義の志向と国民経済の発展に逆行するものとして、否定的に評価される。

その後、ソビエト政府は、穀物の無償徴発と穀物専売制をさらに強化し、私的商業を禁止し、さらに協同組合をはじめとする自治権にもとづく自由な連合組織をも抑圧した。そのために、国民経済の基盤が崩され、農村革命は行き詰まり、それが破局的な飢饉となってあらわれる。

第5章「ロシア革命の歴史的特質と教訓」では、ロシア革命が労働者と農民の複合革命であったことが指摘されると同時に、この複合革命のゆえに民主主義および市民的自由を欠落させた専制国家が出現した、というロシア革命に対する批判的な考察が行われる。ロシアの農民はヨーロッパの農民のように土地の私的所有者ではなく、割替共同体の成員であり、この共同体精神にもとづいて土地の均等な分配を求めた。レーニンはこの農民の要求を革命のエネルギーとして利用し、土地の割替を実施する。共産党はナロードニキのエスエル党に対する主導権を掌握するために、農民革命を承認する。だがこの土地の総割替の実現が国民経済の発展の可能性を打ちこわし、農民の民主主義および市民的自由に対する関心を失わせ、そのために共産党国家は個人的自由を喪失した専制国家へと変容することになる。

ブルツクスは、ロシア革命が知識人や政治家によって謀られたたんなるクーデタではな



く、民衆のエネルギーがもたらした民衆革命であると指摘する。だが、この民衆のエネルギーの実態は、労働者の私的所有に対する嫌悪と、農民の土地割替への渴望であって、このエネルギーは国民経済を担う責任意識も、民主主義と市民的自由の観念も育てず、それらに対する労働者と農民の無関心がソビエト社会を隷属と抑圧の社会に押しやった最大の原因である、とブルツクスは指摘する。

第6－9章からなる第3部では、ブルツクスのソビエト社会主義論が論じられる。

第6章の「マルクス主義的社会主義の批判」では、社会主義経済の機能様式についてのブルツクスの見解が検討される。ブルツクスは生産物の価値が社会的欲求に規定されるとする主観価値論の立場に立つ。商品の価格は購買者の主観的評価と購買力によって規定されるのであるから、価格の決定は市場における需給関係の調整という自生的な過程を経てなされるほかなく、商品価格をなんらかの統計手段によってあらかじめ測定する方法はない。生産手段を集権的に管理する社会主義においては、資源配分の必要な情報や基準を欠いているために、効率的な資源の配分を実施することはできない。社会主義においては、すべての企業が生産物を政府に提供し、次年度の生産に必要な生産手段を政府から受け取る。したがって、「企業の生産性と企業が受け取るものとの間には直接的なつながりが存在しない」（219頁）。そのために、企業はみずからの生産活動の成果とその生産活動に必要な費用との比較を無視し、生産手段を浪費する傾向をもつ。このような企業の浪費を政府が管理と統制を強化することによって解消することは不可能である。

ただし、社会主義経済における経済計算の不可能性を指摘することは、ひるがえって自由放任の市場経済を肯定することにはならない。ブルツクスは、同じく社会主義経済計算の不可能性を唱えたミーゼスのように、自由放任の市場競争を肯定するのではなく、労働立法や社会政策立法などの社会民主主義によって市場を制御する必要性を唱えた。

第7章「ネップ体制の発展と崩壊」では、1921年以降の新経済政策の基本構造が究明される。ソビエト・ロシアはこの時期に私的商業の自由を認め、市場と貨幣に媒介された交換経済を導入する。そして社会主義経済の原理に従って市場の私的経済をコントロールしようとする。このネップ経済は一連の農民反乱という民衆の闘争によってレーニンが譲歩を強いられた結果である、としてブルツクスはこれを高く評価する。

その結果、ソビエト経済は農民経営、私的商工業、私的商業などの私的部門と、国有企業、協同組合企業などの社会部門の二つの部門によって構成され、後者が主導して前者をコントロールする体制へと転換する。ブルツクスはこの経済体制がただちに資本主義の復活を意味するものではない、と言う。この経済システムでは資本主義企業が主導的な役割を果たしているわけではなく、組織された社会化部門が圧倒的な優位に立っているからで

ある。しかし、ネップ経済の進展は、いずれ共産党の基盤を掘り崩し、独裁体制の崩壊を導くであろう、と期待を寄せる。

農村では、1922年の土地法典によって、農民経営に土地利用権が与えられ、土地の割替が禁止され、世帯単位 of 土地所有が選択され、賃労働の利用の自由が承認される。

しかし重工業を最優先する計画経済によって、消費財生産のテンポが緩慢化し、財源調達のための農業税が農業を圧迫して、しだいに私的な商工業が破壊され、「商品飢饉」が発生して、ネップ経済は行き詰まる。

第8章「五カ年計画と強制集団化」では、1929年の第1次五カ年計画以降のソビエト経済の方向転換が扱われる。ソビエト・ロシアはこの時期以降、重化学工業の優先をさらに強化し、農業の強制的な集団化を強力に推進する体制へと突入する。第1次五カ年計画では、それまで将来を予測し誘導するために設定されていた統制数字が計画目標へと転換され、計画目標を実現するために障害となる私的商業と私的工業が厳しく規制されるようになる。

計画目標の達成が最優先され、目標数値の水準が引き上げられ、目標数値を達成するまでの期間が短縮される。その結果、数量目標の達成だけが自己目的化され、製品の製造コストや製品の品質の改善がないがしろにされ、品質が悪化する。また計画の実現に必要な技能労働者や熟練労働者が不足し、労働者の教育訓練施設の立ち遅れが顕著になる。発電所、製鉄業、機械工業などの生産財部門への重点投資がおこなわれ、そのために大衆消費財部門への投資が立ち遅れる。それが財貨の慢性的な不足の状況を、つまり「商品飢饉」を引き起こす。生産全般が停滞しているのではなく、設備財主導型の生産が発展すればするほど商品飢饉が深刻化するという逆説的事態が生まれる。

また五カ年計画は労働力の需要を高めたにもかかわらず、農村の過剰人口がコルホーズの農業集団化政策によって都市に移動することなく農村に滞留し、それが労働力の不足をさらに深刻化し、農民・労働者の貧困を悪化させる。

農村では食料の割り当て徴発が実施され、クラーク撲滅作戦によって60万戸、350万人の農民が強制移住へと追い立てられ、あるいは収容所に強制収容される。この政策によって、農業生産が衰退し、食糧不足がさらに深刻化する。その一方で、穀物の輸出振興策が推進され、ソ連は世界最大の穀物貿易国になる。商業信用と私的商業が禁止され、価格が行政的に決定され、外国貿易が国家によって管理され独占される。このようにして、五カ年計画のもとで、集権型計画経済のシステムがしだいに定着していく。

第9章「ソビエト経済と社会主義」では、ブルツクスによるソビエト経済の社会主義的性格の評価が総括的に検討される。

ソ連邦の社会主義の基本的特徴は、生産手段の国有化と計画経済である。それは資源の配分に際して国家の計画が支配的な役割を演ずることを意味し、したがって国民経済が共産党政府の政治的理由にしたがって組織されることを意味する。その結果、国民経済は国威を発揚する巨大事業に偏向したかたちで編成されるようになり、そのような国民経済の編成のしかたは国民大衆の基本的欲求と根本的に対立することになる。ブルツクスは、この政治的に偏向した計画経済システムを批判し、農民・労働者の共感を得るような経済システムは、ひとびとの需要を反映する市場経済においてのみ可能である、と主張する。

そして、経済システムを前者から後者へと転換するためには、共産党の独裁に代わって民主主義の法制度を設定し、この法制度のもとで国民経済を再編する必要があることを強調する。民主主義を強化するためには、国家から独立した知識人および民衆の社会運動の発展が必要である。ブルツクスは、このような社会運動のなかに民衆の共同の利益を擁護する協同組合運動をも含める。だがソビエト・ロシアは、私的所有と自由市場を破壊することによって、国家から独立したこのような社会運動が育つための土壌を押しつぶしてしまった。

本書は、ブルツクスのロシア語・ドイツ語・英語によって執筆された著作270点、ブルツクスについて論じたロシア語、欧語、邦語の研究文献400点を踏まえて、執筆されている。本書によって、ブルツクスが自己の生涯を賭けて取り組んだロシアの農村革命とソ連の社会主義経済の考察の全貌が復元されたとと言える。

しかし、ブルツクスが格闘した20世紀型社会主義は崩壊してすでに久しい。今日では、むしろ自由放任型のグローバル市場経済が世界を席卷している。この現代世界において、ブルツクスの思想を復元することの意義はいったいどこにあるのであろうか。本書の筆者はそのことを十分に意識している。その意味で、本書はたんなる学説史の研究書ではない。グローバル市場経済の深刻な危機に直面している現代世界にとって、ブルツクスの思想からわれわれはいかなる教訓を引き出すことができるのであろうか。ここでは以下の四つの課題に焦点を当てて検討してみたい。

## 1. 農村革命の評価

ブルツクスにとって、ロシア革命とはなによりも農村革命であった。それはロシアの農村で定着していた土地の割替の慣行を復権させ、国家が土地を強制収容して、農民に均等に土地を配分する革命であった。だがこの農村革命は、ブルツクスによれば、ストルイビ

ン改革が推進した農民経済の発展の流れを押しとどめ、農民による権力の民主主義的な組織化への道を閉ざすものでしかなかった。

この農村革命の課題は、晩年のカール・マルクスが直面した課題と重なり合う。マルクスは、1881年にナロードニキの一派に属するヴェーラ・ザスーリチからつぎのような問いかけの手紙を受け取る。ロシアの農村共同体は、専制君主の行政のくびきを脱してその集合的基礎の上に社会主義を築くことができるのか、それとも死滅の運命にあつて資本主義の発展は避けられないのか、と。マルクスはこの手紙に対して、つぎのような返事を書く。マルクスは、まずこの問いに対する答えを『資本論』の本源的蓄積論からただちに引き出すことはできない、と断ったうえで、農村共同体が「共同体に襲いかかっている有害な諸勢力を排除し」かつ正常な発展のための諸条件を整えることができるのであれば、それは「ロシアにおける社会再生の拠点」（平田清明 [1982] 201頁）となることができる、と。マルクスがこのような回答を行った根拠は、ロシアの農村共同体の歴史的な性格を踏まえた判断にあった。ロシアの農村共同体は「原古的または原始的な協同体の最後の形態」、つまり「農耕共同体」（同227頁）であつて、それは次の点で原古的共同体と区別される。第1に、農耕共同体は「血の絆によって束縛されていない自由な人間たちの最初の社会集団」（同230頁）である。第2に、農耕共同体では、家屋とその屋敷地が耕作者の私的所有になり、定期的に割替えられている。第3に、農耕共同体は耕地が定期的に共同体成員の間に分割され、領有されている。第4に、農耕共同体は強靱な生命力を保持するが、同時に、耕地、さらには森林、牧地、荒蕪地が私的所有に移行するとともに、そこに共同体を解体する力が強力に作用する。

この農耕共同体が進展すると、この第4の動向が強まり、所有の私的契機が共同的契機よりも優位に立つようになり、その結果として私的契機が発展した「第二次形成の共同体」、つまり「新しい共同体」（同235-236頁）が生まれる。この新しい共同体が出現すると、『資本論』が考察した本源的蓄積の道が、つまり農耕民の収奪過程を媒介にした資本と労働の階級的関係への転成の道が避けられなくなる。

マルクスは農耕共同体が「新しい共同体」という二次的な社会形成へと進むかどうかは、その共同体が置かれた歴史的環境に依存する、と言う。ロシアの農耕共同体の場合には、耕地における「個人主義的な分割地農業」と草地などの共有に基づく「集合的農業」（同239頁）が併存し、かつ西欧資本主義の同時存在による共同労働のための物質的条件が用意されている。このような歴史的環境においては、農耕共同体を基盤にしてロシア社会を再生することは可能である、マルクスはこう判断する。

ただし、農耕共同体はそれぞれが孤立して存在するために共同体相互の結び付きが弱



い、という弱点を持っている。そのために、中央集権的な専制政治が共同体の上に君臨し、ツァーリズムの体制が強固にうち固められる。つまり、ツァーリズムの専制は、孤立した閉鎖的な農耕共同体を基盤にして成り立っている。農耕共同体がこの「局地的小宇宙性」（同240頁）を脱して、その資本主義的な上部構造の総体を変革する革命をとまなう場合に、農耕共同体は社会の再生の基盤となりうる。マルクスがザスーリチ宛の手紙において展望したロシア革命とは、農耕共同体の閉鎖的な小宇宙の打破と、その閉鎖的な小宇宙の上に君臨する地主的土地所有およびツァーリズムの資本主義的上部構造の総体的な変革を課題とするものであった。

この総体的な社会変革を通して、マルクスが展望したのは、西欧の資本主義発展とは異なる道をたどってロシア社会が個体的所有を実現する道であった。自己労働にもとづく私的所有が農耕民の土地収奪を通して他人労働に基づく資本主義的私的所有へと転化し、この私的所有の発展の下ではぐくまれる土地と生産手段の社会化を基盤として勤労者の個体的所有を再建する、という西欧型の歴史的道程（「資本の本源的蓄積の歴史的傾向」）に対して、ロシアは農耕共同体にはらまれる個体的所有の契機を他人労働にもとづく私的所有へと転化せずに、共同体の自己変革と上部構造の総体的変革を通して個体的にして社会的な所有を実現する可能性をはらんでいる。

これに対して、ブルツクスが直面した20世紀初頭におけるロシアの農村社会は、マルクスが指摘する農耕共同体から「新しい共同体」への二次的な転成がかなりの程度進行していた。それゆえ、ブルツクスは土地の私有化の進展を踏まえて、農業経営の自律的発展を強化し、土地の区画整理、農民土地銀行、農村信用組合の組織化を推進することによって市場経済に基づく農民経営の発展を展望したのである。

だがこのブルツクスの展望は、他人労働にもとづく資本家的な私的所有を無条件に容認する道とは異なっている。ブルツクスは土地を国民経済の生産手段と位置付け、その生産手段を管理する農民の社会的責任を強調する。また農民が国家主権の民主主義的な運営の担い手として成長することを求める。それは農民がツァーリズムの資本主義的上部構造を総体として変革することを通して農耕共同体を基盤にした社会の再生を展望したマルクスと同じようにして、個体的にして共同的な所有の実現を求めるものであったと言えないだろうか。

しかし、1917年のロシア革命とその後の集権型計画経済の出現は、マルクスとブルツクスがロシア農村の進展のうちに読み取った個体的にして共同的な所有の芽を摘み取り、ツァーリズムに代わる新しい専制国家を生み出すことになったのである。

たしかにマルクスとブルツクスの農村革命の展望は、一見すると正反対の方向を向いて



いるように見える。マルクスは土地の割替に基づく農耕共同体を基盤にしてロシア社会の再生を展望するが、ブルツクスは土地の総割替を否定して、農民経営の自律と市場経済の発展に基づく国民経済の発展を展望する。だが、農耕共同体のうちに私的所有とは異なる個体的所有の発展の可能性を洞察し、農民がツァーリズムの総体的な変革によってロシア社会の再生の主体として生成するよう主張するマルクスと、農民が土地の無償の分与を受ける受動的な受益者ではなく、権力の民主主義的な組織化の担い手になるよう提唱したブルツクスとは、その思想を根底において共有していると思われる。

## 2. ソビエト社会主義経済の評価

ブルツクスは、社会主義計画経済において経済計算にもとづく合理的な資源配分が不可能であることを指摘しただけでない。彼は、西側の資本主義とは異なる、集権型計画経済におけるひとびとの固有な行動様式と、経済の独自の編制のロジックを探り当てていた。ソ連に代表される集権型計画経済の機能様式に関する研究は、第二次大戦後の社会主義経済学者によって本格化することになるが、驚くことにブルツクスは大戦前の1930年代の時点で、すでにその先駆けとなる研究を亡命の地で進めていたのである。

経済が計画によって組織されるということは、経済システムが党の政治的利益に合致するように編制されるということを意味する。党の政治的利益に合致するような計画目標が優先的に設定される。そのために、重化学工業、あるいは軍需部門を優先する蓄積が推進される。このような蓄積体制は、大衆消費財の立ち遅れを生む。また、計画の数量的目標だけが優先されるために、製品の品質がないがしろにされ、品質の悪化が顕著になる。宇宙ロケットや高度兵器を生産する優れた科学技術者が育っても、民生品の技術革新が進まず、大衆消費財の不足が慢性化し、「商品飢饉」のために買い物行列が慣習化される。米国と競うことのできる最先端の宇宙開発技術と軍事技術を誇る大国の国民がラテンアメリカ諸国と変わらない消費生活を送っている。第二次大戦後のソ連経済において顕著となるこのゆがんだ現象を、ブルツクスはすでに第1次、第2次の5カ年計画の時点で洞察していたのである。

ブルツクスは、企業の行動様式についても、西側資本主義とは異なる独自な特徴を検出している。ソ連型社会主義における企業の行動は、企業間の市場競争による需給の調整に規定されるのではなく、国家計画委員会や産業部門別の部門省庁の官僚との駆け引きによって規定される。企業は計画目標の策定に際して、自ら必要とする資材や労働力を過大に申請し、資材や労働力を余分に蓄え込んで資材・労働力の不足の事態に対処しようとする

る。官僚はそのような企業の行動を見越してできるだけ高い生産目標を企業に課し、企業に支給する資材・労働力を絞ろうとする。計画目標の設定自身が、このような官僚と企業家との駆け引きや交渉を通して行われる。そこには、袖の下のやりとりなどの非公式の贈収賄が日常的な慣行として随伴するようになる。そしてこのような駆け引きが、資材と労働力の不足への傾向にますます拍車をかける。

コルナイ・ヤーノシュ [1984] が第二次大戦後にソ連型経済と西側の資本主義経済をたんなる所有形態の違いではなく、諸種の制度とその下での人々の行動様式のちがいに着目して検出した「不足の経済」の仕組みを、ブルックスは1930年代の第1次、第2次五カ年計画の時点ですでに先取りして洞察していることが分かる。

フランスのレギュラシオン理論は、コルナイの制度分析をさらに発展させ、ソ連の指令型計画経済が、西側資本主義とは異なるかたちで商品経済と貨幣経済と賃労働制度を編成する独自のシステムであることを明らかにした（斉藤日出治 [2010]）。

ブルックスの社会主義論は、一見すると、共産党国家が計画に基づいて経済を運営する計画経済と、価格の変動を通して需要と供給を調整する市場経済を二元的に対置して、市場経済の合理性と計画経済の不合理性を対照しているように見えるが、じつはそれを超えて、計画の策定行動の中に、市場経済の当事者とは異なる行動様式を読み取ることによって、のちにレギュラシオン理論が洞察することになる制度と調整様式のロジックを先取りするかたちで認識していたことがわかる。近年では、開放経済体制後の中国についても、国家的調整、市場的調整、制度的調整という三種類のタイプの調整様式が絡み合いながら、国家的調整があとの二つの調整様式に対して優位を保ちつつ、輸出主導型蓄積体制の調整を行ってきたといった研究も進められている（巖成男 [2011]）。このような社会主義の制度経済学による分析の先駆的研究として、ブルックスの研究は現代に復権させる価値を有している。

### 3. 市場経済の評価

ブルックスの計画経済をとらえる批判的なまなざしは、したがって、同時に市場経済を批判的にとらえるまなざしにも通じている。ブルックスは、生産手段が国有化され資源の配分が国家によって運営されるシステムでは、経済が政治的目的に従属するから資源の効率的な配分は不可能であると断ずる。

だが、資本主義の市場経済も政治的目的とけっして無縁ではない。市場経済の組織化においても、政治の強力な作用が働いている。市場経済がはらむ政治的本性を洞察したのは、

ブルツクスよりやや遅れて1930年代における市場経済の危機とファシズムの出現を考察したカール・ポランニーであった。ポランニー [1944] は、1930年代におけるファシズムの出現を市場経済の危機から説き起こす。19世紀に出現した自由主義的な市場経済は20世紀に入ると大量失業、長期の不況など深刻な機能障害をきたすようになる。この市場の機能障害に直面して、競争的労働市場、金本位制、自由貿易の仕組みを復活させるため、国家が社会のあらゆる領域に介入して市場の自己調整機能を回復しようとする。市場の競争的秩序を維持するために、社会のすべての領域を市場原理によって編みあげようとする。そのために、国家の強力な政治的介入が民主主義的な諸政策を圧倒して推進される。土地と労働を保護する社会政策立法は、国家が労働組合、農業団体などの特定の集団の圧力に屈したためであり、国家が特定集団の利益のための手段に成り下がっている、といった批判が巻き起こる。そのような圧力を排除し、土地や労働力を擬制商品として市場で自由に取引するための制度を整備すべきだ。このようにして市場の競争環境を整備するような国家の介入が進展する。市場の機能障害を排するために民主主義と自由を廃棄して、資本主義の救出を図る。市場経済はこのような社会への強力な政治的介入を通してファシズムを誘発する。今日のグローバル市場経済は、ポランニーが1930年代に洞察したこのようなファシズムとの親和性を強力に呼び戻しつつある。

ブルツクスは、ソビエト・ロシアの社会主義がひとびとの経済的欲求に則した資源配分を政治的目的のためにゆがめることを指摘することによって社会主義を批判し、市場経済と私的所有を支持したが、その理由は後者のシステムが民衆の自由をはぐくみ、ひとびとの基本的欲求に適合した資源の配分をもたらすからであった。ブルツクスが自由放任の市場経済を支持しなかったのは、そこに社会主義による経済システムの政治的利用と同じ危険性をかぎとったからにはほかならない。そのことを考えると、1930年代におけるブルツクスの社会主義に対する批判的なまなざしは、21世紀の今日におけるグローバル市場経済を批判的に洞察するための有益な視座を提供してくれることが分かる。

#### 4. 民衆の自由主義の視座

ブルツクスは、土地の私的所有と市場の自由な取引が人間の基本的な欲求の充足に適合した経済の活動を保証するのに対して、国家による生産手段の支配と管理にもとづく社会主義は人間の基本的な欲求を政治的な目的に従属させ、資源の配分をゆがめるものであると批判する。そこでは、市場経済と計画経済が二元的に対比され、前者の視点から後者が批判されているように見える。だが、ブルツクスが何よりも重視したのは、知識人や大衆

が経済システムの運営に対して責任を果たすこと、そのために知識人や民衆が経済の運営に積極的に関わることできるような制度を整備することであった。ブルツクスが唱える「民衆の自由主義」とは、私的利益を追求する私的諸個人による市場競争の自由を無限定に容認するものではなく、経済のシステムをひとびとの基本的欲求に適合させるように運営する＜責任をとまう自由＞であった。かれは「勤勉な民衆が、市民すなわち国家および国民経済の対等な権利を有する構成員として、自由の責任ある担い手へと成長してゆくことを望んだ」（森岡真史 8 頁）のである。

それは、ひとびとの自由な意思に基づく行動を放任するのではなく、この自由な行動が社会にもたらす結果に対して責任を負う自由、つまり「責任に基づく自由」を掲げて市場競争の自由を批判するカール・ポランニーと同じまなざしだと言える。それゆえ、ブルツクスの自由の概念は、市場原理主義者が唱えるような市場選択の自由の概念をはるかに超えている。今日の新自由主義的資本主義は、市場選択の無制限な自由の容認によって社会に破局的な危機を招来している。ブルツクスが指摘する自由の責任ある担い手としての民衆の成長が今日ほど求められている時代はない。ブルツクスの思想を現代に復権させることの意義はここにある。それはまた、マルクスが市場の私的取引の自由がもたらす社会諸関係の物象的自立を批判し、この物象的展開を社会成員の協同の力で制御することのうちに「自由の王国」を展望したまなざしにも通じているのではないだろうか。

## 参考文献

- 森岡真史 [2012] 『ボリス・ブルツクスの生涯と思想—民衆の自由主義を求めて』 成文社
- Chavance B. [1990] *Le système économique soviétique*, Edition Nathan. [斉藤日出治訳『社会主義のレギュレーション理論』 大村書店]
- 平田清明 [1982] 『新しい歴史形成への模索』 新地書房
- 斉藤日出治 [2010] 「制度経済学の言説と市民社会の統治テクノロジー」『千葉大学経済研究』 第 25 巻第 3 号
- 若森みどり [2011] 『カール・ポランニー—市場社会・民主主義・人間の自由』 NTT 出版
- Polanyi K. [1944] *Great Transformation*, Beacon Press. [野口建彦ほか訳『大転換』 東洋経済新報社]
- 巖成男 [2011] 『中国の経済発展と制度変化』 京都大学学術出版会
- Kornai J. [1984] *Selected Writings of J. Kornai*. [盛田常夫編訳『「不足」の政治経済学』 岩波書店]